

子供のころ戦争があった

父から娘へ

石井 章



石井 章

子供のころ戦争があつた
父から娘へ

人文書院

石井 章 (いしい・あきら)

1935年東京生。45年6月から46年10月まで中国東北地区
(旧満州)の新京(現長春)と安東(現丹東)に滞在。
帰国後、東京教育大付属中・高校を経て、61年東京大学
教養学部教養学科(文化人類学)卒業。62年アジア経済
研究所入所。66年から68年までメキシコ、81年から83年
までメキシコとアメリカに滞在。その間メキシコ、ペル
ーなどで農村調査を行なう。専門はラテンアメリカの農
業・土地問題。現職はアジア経済研究所主任調査研究員。
編著書:『ラテンアメリカの土地制度と農業構造』(アジ
ア経済研究所)

現住所:東京都文京区千石三丁目19-3

子供のころ戦争があった

——父から娘へ——

一九八四年十二月一日初版第一刷印刷
一九八四年十二月八日初版第一刷発行

著者 石井 章

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西入

電話〇七五・三五一・三三九一

振替京都〇一一〇三

印刷 河北印刷株式会社

製本 坂井製本所

©1984, Akira ISHII

Printed in JAPAN.

ISBN4-409-24018-8 C0023

子供のころ戦争があった
目次

一	親と子（1）	7
二	親と子（2）	23
三	戦争が終ったとき	35
四	お父さんの受けた教育（1）	50
五	お父さんの受けた教育（2）	65
六	中国と日本	84
七	ソ連と日本	100

八 東西対立から南北問題へ

115

九 南の国の現実

131

十 ビーバ・メヒコ

145

十一 愛国心について

165

十二 子供のころ戦争があった

——日本人の異人種観

181

終りに

198

あとがき

202

子どものころ戦争があった

——父から娘へ

—
ゆり子へ

一 親と子（1）

お父さんがはじめてメキシコへ行ったのはいまから十五年前の一九六六年四月のことです。五年といえば今年はお父さんとお母さんの結婚十五周年にあたりますね。ですから当時お父さんたちは新婚ホヤホヤでした。お父さんより三か月遅れて七月にお母さんもメキシコに来ました。そこで二人の新生活が始まりました。お父さんたちにとって世帯をもつてはじめての暮らしが外国生活であり、慣れないことばかりでした。二年間はあつという間に過ぎてゆきました。そしていよいよ日本へ帰ることがまったとき、お母さんはおなかの中に赤ちゃんを宿していました。おなかの中の赤ちゃんはお母さんといっしょにメキシコからスペインのマドリッド、バルセロナを経てパリ、ロンドンと旅行しました。そして一九六八年の四月の第二日曜日、イースターの日

に東京に着きました。それから五か月後の九月十三日に東京の虎の門病院であなたは生まれたの

です。

その日の晩、お父さんは病院の新生児室のガラス窓越しにあなたとはじめて対面しました。生まれたばかりの赤ちゃんは猿に似ていてあまりかわいくないなどとよくいわれますが、生後数時間のあなたは、親の欲目でしょうか、人間の赤ちゃんらしいとてもかわいい顔をしていました。

病院を出るともう夜遅かったので、お父さんはタクシーに乗りました。するとタクシーの運転手さんがお父さんに、「またマージャンですか」と聞きました。こんな遅い時間にビジネス街でタクシーを拾う、酒に酔っていない客を見てそう聞いたのでしょうか。「いや違う、病院へ行ってきたところで……」とお父さんが答えると、運転手さんは「おめでたですね」、そして「はじめてのお子さんですね」といいました。「病院へ行ってきた」とだけお父さんはいったのに、もう運転手さんに、赤ちゃんが生まれたこと、しかもはじめての赤ちゃんだということを見抜かれてしまったのです。きっとお父さんの声はずんでいたのでしょう。嬉しかったのです。

それから毎日、お父さんは、お母さんと赤ちゃんに会いに病院へ通いました。退院してから、お父さんとお母さんは赤ちゃんが情操の豊かな子に育つようにと、モーツァルトのクラリネット五重奏曲をレコードからわざわざテープに吹き込んで赤ちゃんに聴かせました。親バカですね。しかし赤ちゃんは泣いているときでも、その音楽を聞くと不思議に泣きやみました。

町田の団地から入間市のグリーンヒルへ引越してきたのは七年前の四月、ゆり子は満五歳、貴は一歳半のときでした。あなたは若杉幼稚園の年長組に入りました。

引越して間もない五月頃だったと思います。勤めから帰ってきたお父さんが家に近づくと、子供のものすごい泣き声が聞こえるのです。それは六号棟全体はもちろんその周囲にまで響く特別大きな泣き声でした。そして階段からゆり子が外へ飛び出してきたのです。

小さいときからよく泣いたゆり子だったけれどもこのときの泣き方はふだんと違っていました。顔は恐怖でひきつれ、頬は赤紫色にふくれていました。階段で転倒して頭でも打ったのかと心配しましたよ。一階の鈴木さんのおばさんがびっくりして外へ出てこられましたね。覚えてますか。あなたは「いない、いない」といつて泣いていました。お母さんが家にいない、というのです。お父さんが家に入ると、お母さんはいませんでした。貴が一人、幼児用の椅子に坐らされてテレビに向かったまま泣いていました。だけど貴の泣き方は特別の泣き方ではなくて、いつもと同じでした。さっきまでいっしょにテレビを見ていたお姉ちゃんが急に泣きだしたので、わけもわからずつられて泣いたのです。

それから待つほどなくお母さんは帰ってきました。実はテレビを見ていたゆり子と貴に、「お母さんはちょっと買物に行ってきます。すぐ帰ってきますからね」と声をかけて出かけたのですが、二人ともテレビに夢中でお母さんの声が耳に入らなかったのです。気がついたらお母

さんがいない。いくら呼んでも答えがない。家中さがしても見つからない。小さい弟と二人だけとり残されてしまった、そのときの恐怖はきつたとえようもないほど大きかったのでしょう。

お母さんというのはいつも身近にいるのがあたりまえ、呼べばかならず答えてくれる人なのです。その人が急にいなくなったとき、あなたは天と地がひっくり返ったかのように気も動転してしまったでしょう。ほんとにそんな泣き方だったのですよ。五歳の幼児にとってお母さんとはそんなに大切な存在なのですね。

そんなゆり子ももう十二歳。いよいよ中学生ですね。お父さんの二度めのメキシコ駐在がきまったとき、中学進学を前にしたあなたは、一時お父さんお母さんと別れてでも、日本の中学で寮生活を送る覚悟をきめましたね。実際にはそうならず家族そろってメキシコへ行くことになりましたが、お父さんも一時はそのつもりで、むこうから日本にいるゆり子へあてて書く手紙の構想を頭に描きました。いっしょにメキシコへ行くことになったので手紙を書く必要はなくなりましたが、せっかく長い手紙の構想ができたのでそれを無駄にするのは惜しいですから、こうして文章にします。この文はお父さんからの中学入学祝いとしてあなたに進呈します。

十二歳というのは人生の一区切りとして重要な意味をもっていると思います。中学入学ということだけでなく、少年期から青年期へ移り変わるちょうど過渡期にあたるからです。この頃から人

生とは、社会とは、といった問題を真剣に考えるようになります。お父さん自身の経験からいうとそうです。つまり自分の身の回り以外のもっと広い外の世界へも関心が向き、そういう外の世界を自分なりに認識し始める時期です。そういう意味では人生の一つの出発点にあたるということもいいかと思っています。

十二歳。人生の出発点。そういうとき、いろいろな思いがお父さんの頭の中をよぎります。お父さんの滋水^{シスイ}兄さんは十二歳、ゆり子の年で亡くなってしまいました。そのときの状況は『黃海に死す』に書いたとおりです。十二歳、あるいはそれよりもっと小さい年齢で、あのいまわしい戦争のためにたいへんな目に遭った人がたくさんいます。『ガラスのうさぎ』の著者の高木敏子さん。敏子さんが昭和二十年三月十日の大空襲でお母さんと妹さんたちを失い、さらにその年の八月にお父さんを失ったのは十二歳から十三歳、小学校六年から中学一年にかけての時期でした。『あの日夕焼け』の著者の鈴木政子さん。政子さんが日本の敗戦直後の旧満州（中国東北地区）で、一家の生計を支えるために物売りをしてお金をかせいでいたのは十一歳のときです。この人たちはお父さんと同世代で、お父さんにとっていわば「戦友」にあたります。

お父さんが両親と別れて中国東北地区から日本へ帰ってきたのは十歳のときでした。お父さんの兄さんがはじめて両親と離れて暮らすことになったのはやはり十歳、小学校（その当時は国民学校と呼ばれていました）五年生のときでした。学童集団疎開で宮城県の鳴子温泉へ行ったので

す。

戦争中の昭和十九年の夏、いよいよ米軍機の本土空襲も間近に迫り、日本の敗色が濃くなってきた頃です。空襲の危険を避けて、あるいはきたるべき本土決戦に備えて、学童はより安全でないなかへ疎開させるように、との方針が出されました。学童疎開には縁故疎開と集団疎開の二種類がありました。縁故疎開とは、いなかにおじいさん、おばあさんとか、その他の親戚のある人がその縁故を頼って子供を疎開させる場合です。お父さんたちのようにいなかのない人は、学校から先生が引率して集団で子供を地方へ疎開させます。これが集団疎開です。集団疎開に参加できるのは三年生以上でした。お父さんは当時三年生でしたが都合があって参加せず、五年生の兄さんだけが参加しました。

その頃東京では食糧難がひどく、育ち盛りの子供をかかえる人は子供に十分食べさせることができず悩んでいました。子供を親許から離して疎開させるのも、ひとつにはそういう事情があったのです。

当時の農村は、いまと違ってけっして豊かではないにせよ、少なくとも食糧は自分のところで生産していましたから、都市よりはましでした。縁故疎開でいなかへ行った子供たちは東京にいたときよりはましな食事にありつけたのではないかと思います。集団疎開の場合はそうはいきませんでした。いくらいなかの方が東京よりは食糧事情がよかったとはいえ、自分たちが食べて

いくだけでせいっぱいで、とても東京から大挙してやってきた学童に分けてやるほど食糧が余っていたわけではありません。集団疎開の子供たちはひもじさに泣きました。お父さんは「ひもじさ」という言葉を使いましたが、この言葉は現代ではあまり使われないようです。この言葉によって表わされるような状態がいまはまず存在しないからです。いまだったら「おなかがすいた」という言葉を使います。しかし「おなかがすいた」と「ひもじい」とでは感覚が違うのです。「おなかがすいた」といった場合には一時的な空腹感です。この感覚はものを食べることによって解消し、やがて満腹感にとって代ります。いまの日本の家庭では、子供がおなかがすいたならいつでも食べられるように、食べ物がおいてあるのが普通です。しかし当時は違っていました。「ひもじい」という感覚は食べ物を食べれば解消するというようなものではありませんでした。というより空腹感が解消するくらい十分な食べ物があったのです。

縁故疎開でいなかへ行った学童はひもじさに泣くことはなかったかもしれませんが、別のことで泣かされました。東京から一人ポツンといなかの学校に入れられた子供は、いなかのいじめっ子に泣かされました。集団疎開の子供たちはいままでのクラスメートや先生といっしょですから、いなかのいじめっ子に泣かされることはなかったでしょう。しかし彼らの大部分ははじめて親許を離れた子供たちです。先生やクラスの友達大勢といっしょに汽車に乗って遠いところへ何泊も旅行に出かけるというので、最初は修学旅行にでも行く気分ではしゃいでいた子供も多かったと

思います。しかし実際にはそんな楽しいものではありませんでした。それに修学旅行のように数日間というものではありません。それはいつまで続くかわかりませんでした。数か月あるいは場合によっては何年も、とにかく日本が戦争に勝つまで、親許を離れて頑張らなければならないというさだめになっていました。集団疎開に参加した子供の中で一番小さい子供は、いまの貴と同じ三年生でした。「お母さんのところに帰るんだ」と泣いていた子供もあったそうです。

兄さんが集団疎開へ出発する日、お父さんは千石のおじいさんといっしょに集合場所まで送って行きました。集合場所は学校の校庭でした。家族が大勢見送りに来ていましたが、どうもお父さんの記憶では、ついてきた親は父親ばかりで母親はいなかったように思います。もし母親がついてきていたら、別れの最後瞬間になって、行くのはいやだといって母親にとりすがって泣きだす子供があったでしょう。だから学校側であらかじめ母親は来ないようにと伝えていたのではなかったかと思います。

昭和十九年の夏の夕方、薄暗くなりかけた学校の校庭で兄さんと別れました。おじいさんと兄さんにとってそれは第一の別れでした。第二の別れは二年後の昭和二十一年の十月、中国東北地区の安東で、まだ日の出前の薄暗い時刻でした。それは二人にとって永遠の別れになってしまいました。